

天空拳勝負録

(中卷)

藤原審爾



天空拳勝負録

（昭和五十七年）

天空拳勝負録（中巻）

昭和五十五年二月十日

初版発行

著者 藤原 審爾

発行者 清水 文人

発行所 株式会社 双葉社

東京都新宿区神楽坂一の八
郵便番号 一六二

電話 東京 (〇三) 三六一五二二

振替 東京 一一七二九九

印刷 慶昌堂印刷株式会社

製本 (有) 細沼印刷製本所

落丁・乱丁本はお取り替えます

目 次

尾張すぎれば火の時雨

女郎蜂

毒針

無息

無眼

火術

自爆

湖畔の宿のくノ一音頭

捻殺

九

三

三

三

五

七

八

骨肉

三

風と闇

二四

窮地

二六

九死一生

二七

白刃

二八

怪鳥

二九

山紅い秋葉の里の幻術師

秋の冬

三〇

駿遠引導尊

三一

魔人

二六

昇天

二六

無辺流忍び

二七

裂帛

二五

心眼

二三

富士の裾野の山でいらほつちの神

魔族

二五

怪童

二五

闇礫

二六

風 葬

三三

鳥 肌

三三

山 犬 たち

三四

対 決

三五

指呼の間

三六

装
幀

田
代

光

尾張すぎれば火の時雨

女郎蜂

そこは、峠の頂きから、少しおりたところで、眼下に尾張の平野が見える。

晩秋の白っぽい陽をうけ、少しかすんだように見える平野に、雲の影がおちている。そのはるか彼方にあるひとむれの家々のあたりが、尾張名古屋である。

峠道の曲がり角の草っ原で、腰をおろした左門太は、少し離れたところの崖っぷちで、座禅している天心のほうを、ちらりと見た。

端然と座した天心の背のところに、白い金剛が寝そべっている。

睡た氣に半眼をとじている。

まるで、金剛は、天心の忠犬のように、天心を守っているのである。

天心と金剛とのつきあいは、ごく短いにもかかわらず、金剛はまるで自分を育ててくれた主人に仕えるように、忠実なのである。

そういう仲になれるのは、天心の資質であって、いつものことながら左門太は、わが身の至らぬことを、思い知らされる。

はなはだ自尊心をきずつけられることなのだが、くやしさを覚えたりしない。

むしろ左門太は、天心に感心し、なんとなくよくこびを覚えるのである。

左門太は少し離れたところの、松の根へ腰をおろし、見るともなく金剛を見ていた。

秋陽をうけて寝そべっている金剛は、一見心地よさそうに、半眼をとじ、いまにも眠りそうな様子なのが、そうではない。

時々、往来する旅の者の様子や、ちゃんと調べて、警戒しているようである。

はるか遠くから聞こえる足音を、ちゃんと知っており、それを追っている。

ふいにその金剛の耳が、びくりと動き、ぴんと立ったような動き方をした。

怪しい足音を聞きつけたような様子なのである。

それで左門太も耳を澄ませてみた。

足音ひとつ聞こえない。

聞こえるのは小鳥の声、梢を渡る風の音のみである。

しかしそのうち、左門太たちがさきほど越えた峠のほうから、足音が幽かに聞こえた。

子どものような小さい足音である。

金剛の耳は、あきらかに緊張し、その足音を注意している。

その気配が、尋常でない。

やがてその足音が近づき、左門太たちのうしろの坂を通りだしたとき、さり気なく左門太はふりむいた。

小さい足音の主は、子どもではない。

娘の独り旅である。

小柄な娘で、なにかいそいでいる。

普通ではないそのあわただしい気配が、ことさらに金剛を刺戟したらしい。

なんとなく金剛の気持ちがあつたような気がし、左門太は、それでまたのんびりした気分にもどりがけたのだが、そうではないらしい。

金剛は少しも警戒を弛めない。

束の間、別の足音が二つ聞こえた。

荒っぽい足どりである。

いそぎ足に坂をおりてくる。

「足の速い娘だな」

くやし氣に言う男の声がし、それに答えて低い笑い声が聞こえてきた。

「あたりまえだ、向こうは必死で逃げているんだ。山の中で貴様のような男に声をかけられてみる、逃げだすのがあたりまえだ」

「ああいう小柄な女は、こたえられぬものだ。城下へはいるまえに、かならずわしは追いつくぞ」
せわしなく二人連れは、左門太たちのところを通りすぎた。

二人とも袴をはき、壮士風である。

どうやら理不尽な振舞いに及ぼうという魂胆らしい。

その二人が通りすぎると、金剛は安心したように、おだやかな感じになった。

しかし左門太は、それきり落着いていられなくなり、松の木の根っこで腰をあげた。

「先に行くぞ」

と声をかけ、二人の男たちのあとを追いはじめた。

千春とおなじ年頃の旅の女の災難を、はっておけなくなったのだった。

峠の頂きから、少し坂道を下った道端で、二人の旅の男が立ちどまって、曲がり角の崖つぶちの天心を眺めている。

一人は行商人のような荷をかついでおる三十すぎの、のっぺりした顔立ちの男である。

もう一人は、旅の旦那といったふうな、四十半ばの、がっちりした体つきの男で、菅笠をかぶっている。日灼けた顎の笠の紐が、白く浮き立っている。

そこへ、このあたりの山の者らしい男が、通りかかり、二人の男の横を通りぬけた。通りすぎながら、その山の者が、二人の男へ、低く、

「どうした」

と声をかけた。

年配のほうの男が、

「邪魔が入った。旅の壮士風な奴輩が、於^おはちに目をつけた」

すぐそれへ答えた。のっぺりした男が、山の者のような風体の男へ、苛^{いら}立たしそくに、

「抜け駆けするなよ」

とすどく言った。

山の者らしく鎌を腰にぶちこんだ男は、鼻であしらうように、

ふん

と嗤^{わら}った。

そのまま答えずもせず、とっとと坂道を下っていった。

坂道の向こうの曲がり角の崖っぷちにある草っ原のところに、天心と白い犬とがいる。

崖っぷちの天心は、一ト蹴りすれば、崖下へ落ちそうである。

二日まえから、天心と左門太を見つけ、遠くから様子を見ているのだが、なかなかつけこむ隙がない。はじめて二人がはなればなれになったのだから、この好機を逃すことはない。

一人かたづけければ、二千両という金になるのである。

なにも指をくわえて、ひっこんでいることはない。

いきなり背後から鎌で斬りつけられ、それでかたがつきそうである。

ひらりと体たをかわせば、崖から足をすべらせ、転落しそうである。

山の男は、だんだんかたをつけられる確信が出来、どうにも我慢できなくなった。

いそぎ足になった。

あと十間ばかりというところまで近づいたとき、その男は、低い唸り声を耳にした。

天心の白い犬が、低く唸っているのである。

糞犬め

その男は、ぬけぬけと、その唸り声に気がつかぬふりをして、天心のほうへ近づきかけた。

とたんにむくくと金剛が立ち上がり、いちだんとすごい唸り声をあげだした。

全身に緊張がみなぎり、金剛は猛々しくなっている。

凝っと睨んでいる。

これ以上、間合いを詰めれば、躍りかかってくる気である。

その男は、

ちえっ

と舌打ちしたような顔つきになった。

好機はなくなつたのである。

いたしかたなく、山の林のほうへより、出来るだけ、金剛から遠いところを撰んで、曲がり角を通りぬけていった。

少しあとから坂をおりている二人連れの菅笠をかぶつた年配の男のほうが、にやにや笑いながら言った。

「あの藤波は、長生き出来ンな」

間もなく二人は、曲がり角にさしかかった。

金剛はいくらか温和おとなしくなっていたが、まだ唸りつづけている。

二人は、用心深く、その曲がり角を通りすぎた。

少し離れてから、年配のほうが、

「どうも犬は苦手だ。ごまかすことが出来んからな」

と気軽に言った。

もう一人の、のっぺりした、表情のない、奇妙な感じの男のほうは、その連れの話に少しものらなかった。いらいらしており、ぶすっと言う声もとがっていた。

「あの馬鹿のために、とうとう、こつちのことを、気づかれてしまった。やりにくいことになったっ」

あの馬鹿という山の者の恰好をした男は、少し離れた坂下の林の中で、山の者の衣裳をあらため、旅の者の姿になり、のこのこ、坂道へ出てきた。